

## 日本人学生の海外留学を促進する方策 東北大学の留学相談者と留学未経験者を対象とする調査結果を基に

著者	?橋 美能
雑誌名	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要
巻	4
ページ	373-381
発行年	2018-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00123119">http://hdl.handle.net/10097/00123119</a>

## 【報告】

## 日本人学生の海外留学を促進する方策

—東北大学の留学相談者と留学未経験者を対象とする調査結果を基に—

高橋 美能<sup>1)\*</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

本稿では留学を阻害する要因調査から、日本人学生の海外留学を促進する方法を検討する。先行調査では、留学の阻害要因として費用や語学力の不足、健康・治安面の不安、就職活動との兼ね合い、留年の可能性などが挙げられ、留学の促進には奨学金の充実や4年間で卒業できる仕組みづくり、事前の語学力習得に向けた対策の必要性が指摘されている。筆者が東北大学で行った留学相談者と留学未経験者への調査でも、同様の結果が確認された。留学未経験者へのアンケート・インタビュー調査では、「日本の生活に満足している」「留学より課外活動」などの意見も見られたが、半数以上の回答者は「留学に興味がある」と答えており、当初「自ら情報収集するほど留学に意欲がない」と答えた学生がインタビューの中で留学情報を提供していくうちに興味が高まり、留学への意志を明らかにする学生も出てきた。このことは、一歩踏み込んだ支援が留学促進につながる可能性を示唆した。

## 1. はじめに

2014年に文部科学省の『スーパーグローバル大学創成支援事業（トップ型）』に採択された東北大学では、学生の海外留学の増加と質の向上を図っている。大学間学術交流協定校数は35ヶ国・地域 217機関、部局間学術交流協定校は60ヶ国・地域 482機関に及び（2017年10月時点）、国立大学の中でも最多を誇る。協定校数が多いことは、学生にとって留学先の選択肢が広がるだけでなく、多様な学生を受け入れるためキャンパスの国際化にもつながる。

実際、どれくらいの学生が学内の国際化を意識し、留学に興味を持っているのだろう。隔年で実施している2015年度の「東北大学学生生活調査のまとめ」によると、2595人（学部生1,496人、大学院生1,099人）中、52%の学生が「留学したいとは思わない」と回答している。同調査で本学入学後、大学内外の留学制度等を利用して留学したことがあると答えた学生は全体の11%であった。また、どんな形で留学したいかの質問に対しては、「1か月程度の語学留学」（27%）、「6か月程度の海外留学（単位取得を含む）」（16%）、「12か月程度の海外留学（単位取得を含む）」（9%）、「12か月以上の海外留学（単位取得を含む）」（6%）との回答が続き、留学する場合は短期間を希望する傾向が見

られる。

本稿では、留学に興味があり相談に来る学生とこれまで留学経験のなかった学生の異なる2集団に対して実施した調査結果を通して、本学の学生の留学阻害要因を明らかにするとともに、留学に必要な支援のあり方と、海外留学を促進する方策を検討する。なお、本稿で紹介する調査の実施、および内容については、東北大学高度教養教育・学生支援機構の研究倫理委員会の審査で承認を得ている。

## 2. 先行調査

本章では、これまで行われてきた留学の阻害要因や必要なサポートに関する調査結果を紹介する。

2007年に国立大学国際交流委員会留学制度の改善に関するワーキング・グループが87の国立大学に実施したアンケート調査では、留学の阻害要因として「帰国後、留年する可能性が大きい」「経済的問題で断念する場合が多い」「帰国後の単位認定が困難」が上位3位に挙がっていた（文部科学省 2014資料）。

2009年にベネッセ教育開発センターが実施した海外留学に関する調査では、留学経験者と未経験者それぞれに留学を決断する際の阻害要因と留学を断念した理由を尋ねている。留学経験者の阻害要因は「留学

\*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 mino.takahashi.c3@tohoku.ac.jp

にかかる費用が高く負担が大きかった」(35.7%)、「留学に必要な語学力が不足していた」(31.3%)、「健康や治安面で海外生活に不安を感じた」(19.5%)の順、留学未経験者でも「留学にかかる費用が高く負担が大きかった」(68%)、「必要な語学力が不足していた」(39.8%)、「家庭の事情(費用負担以外の事情)」(31.6%)の順であり(ベネッセ 2009年調査より)、費用や語学力の不足が共通して挙げられていたことがわかる。

小林(2011)は、「海外留学と国際教育交流」の受講生約100名を対象に「自分の理想の留学と実現に向けた問題点」についてレポートを書かせたところ、経済的な理由、語学力の不足、就職活動時期との兼ね合いが3大要因に挙げられたという(小林 2011: 3)。

池田(2011)は、2010年に茨城大学で実施した海外留学説明会時のアンケート結果をまとめている。茨城大学では、毎年5月に開催する海外留学説明会に、例年80名程度の学生が参加する。参加者の6～7割は1年生で、留学を決めるうえで重要な要因のトップに挙げられたのが「4年間で卒業できる」ことであり、次に「交流協定校である」「奨学金がもらえる」が続いたという(池田 2011: 5)。また、希望する留学先については6割以上が「英語圏」で、「次に中国、韓国」を挙げる。茨城大学ではアジアの協定校との研究交流が盛んなため、中国や韓国の大学への派遣人数枠が大きく、英語圏の留学枠は限られていることから、学生の希望と大学の期待にギャップがあるのではないかと指摘した(池田 2011: 6)。

2014年9月にブリティッシュ・カウンシルが全国の16～25歳の日本人学生と卒業後間もない男女を対象に留学に関する調査を行っている。これは自己記入方式のオンラインアンケート(日本語)で、2,004人から回答を得たが、そこでもやはり「留学の阻害要因として語学力の不足、費用、安全面の懸念」が挙げられたという。一方、留学を決めた理由としては、「語学力の向上」がトップであった。また、留学経験がある学生(12%)の留学目的としては、「語学力の向上」(79%)、「海外で働くため」(35%)、「友人や家族、教授に進められたから」(30%)の順、留学に関心のある学生(33%)の場合は、「語学力を向上させたい」(79%)、「海外留学がしたい」(53%)、「海外で働くきっかけにしたい」

(47%)、「もっと自立したい」(32%)、「研究分野の単位を取りたい」(31%)の順であったという。また希望留学先は、「米国(24%)、オーストラリア(16%)、英国(15%)、カナダ(11%)、ドイツ(7%)」と、英語圏だけで66%を占めていた(ブリティッシュ・カウンシル 2014年調査より)。

小島、内野、磯部、高田、二本松、岡本、三宅、神人、矢武、吉原(2014)は、学生の「内向き」志向と「外向き」志向が留学にどのような影響を及ぼすのかを調査分析し、「内向群は就職活動に役立つ経験、自己の内的成長、日本人アイデンティティは留学を通して得られにくいと考える傾向にあった」(小島ほか 2014: 25-26)と述べる。また、内向きな学生は外向きな学生に比べ、留学生活への不安を挙げる傾向が見られ、「留学決定前には、適切な情報を提供することで不安を軽減させるのが有効である」と説明する。さらに、「留学を迷っているときや留学決定後は、学生自身が抱える不安をしっかりと聴き、寄り添うことが重要」(小島ほか 2014: 26)と述べている。

以上は一例であるが、留学の阻害要因や留学希望先に関する先行調査は、全国規模のものから、大学、また授業単位で実施されたものまで多岐に渡って行われてきた。その結果、留学の阻害要因としては、留学の費用・語学力の不足、健康・治安面の不安、就職活動時期との兼ね合い、4年間で卒業の有無が挙げられた。留学先としては英語圏の人气が高く、留学促進には奨学金の充実をはじめとする金銭面での支援、4年間で卒業できる仕組みづくりと単位互換、語学習得対策が必要であり、危機管理や留学情報、相談の充実なども期待されていることが明らかになった。

### 3. 留学相談者を対象とする調査/結果

東北大学では、春・夏の学期休み中の語学・テーマ別短期研修、1学期または1年未満の交換留学、理系大学院生向けの研究留学、ダブルディグリーなどの留学プログラムを提供しており、学内で5月と10月に説明会を行っている。

グローバルラーニングセンター(GLC)では、学部・大学院生の留学を促進すべく、毎週月曜日から金曜日まで曜日ごとに異なる教員が、留学に興味がある学生、

応募を考えている学生、応募後に相談のある学生を対象に留学アドバイジングを行っている。場所は1・2年生の多くが学ぶ川内キャンパスのグローバルラーニングセンター教員室で、昼休みの時間を中心に1人30分間の個別面談形式をとっている。相談に来る学生は予め留学目的や希望時期、国などの情報を記入した「相談シート」を持参する。面談予約はメールで行い、面談記録は共有フォルダに残し、教員間で閲覧できるようにしている。

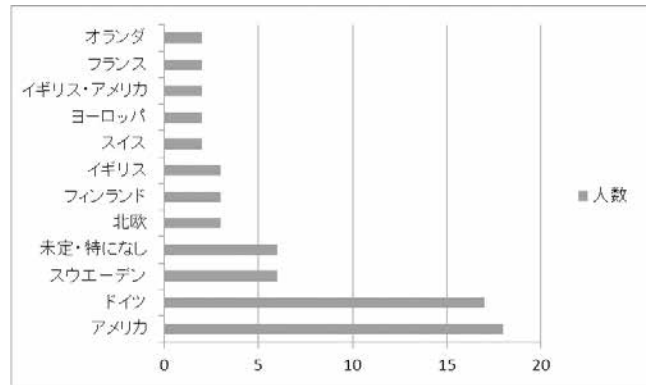
筆者は「相談シート」とは別に留学の阻害要因と大学に期待するサポートについてアンケートを取っている（アンケート内容は添付資料1を参照）。本稿では2015年6月～2016年10月の間、78名の学生の回答結果を分析する。同一学生が複数回相談に来る場合は、初回のみ回答してもらっている。本稿では記述された回答をキーワードに直して集計した。この作業は、より客観性を持たせるため、筆者と大学院生の2人で話し合いながら進めた。

回答者の内訳は、63名が学部生（工19名、文16名、経済13名、教育6名、法3名、医・農2名、理1名）、15名が大学院生（工・文・経済が3名、医・理・教育・法・情報科学・国際文化が1名）であった。相談者の学年は、1年13名、2年29名、3年11名、4年10名、博士前期1年10名、博士前期2年4名、博士後期1名で、78名中7名は留学生であった。

本学では毎年10月と6月の2回、大学間学術交流協定校への1学期、または1年未満の交換留学生を募集しているため、応募締切前の10月や6月は相談が集中する。相談内容は、78名の相談者のうち、3名が私費留学、2名が短期プログラム、1名が短期と交換留学の両方についての相談で、それ以外は全て交換留学に関する相談であった。留学希望期間は、短期と回答した学生が1名、1カ月間が2名、短期と交換留学の両方が1名、半年間が17名、1年間か半年間が4名、1年間が52名、3年間が3名、であった。

### 3.1 留学希望先

まず、留学希望先の結果は図1のようになった。



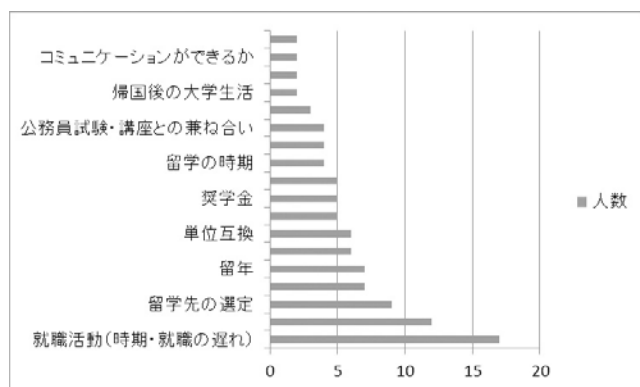
【図1：相談者が希望した留学先の国名】

英語圏であるアメリカの人気が高い。これは、2章の先行研究の結果と一致する。

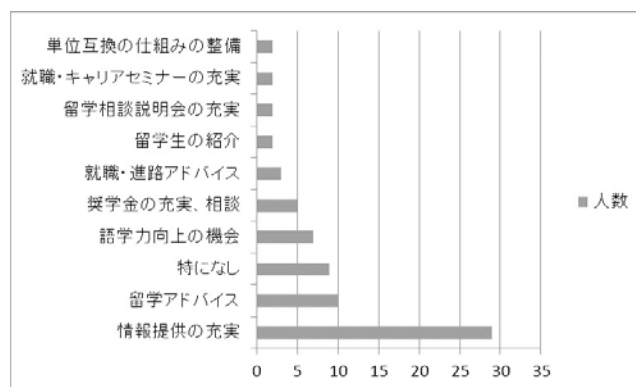
希望留学先第2位はドイツである。ここ数年、本学ではドイツ留学を希望する学生が増えている。先行研究のブリティッシュ・カウンシルの調査でも同様の結果であった。本学の場合、自身の専門分野との関係でドイツを希望する学生もいるが、ドイツの大学では英語で受けられる科目が多いことも、人気の背景であろう。北欧の大学も同様である。その他の人気理由は、語学要件である。交換留学に応募するためには、語学要件を定めている協定校の場合、要件を満たす語学証明書の提出が必要だが、非英語圏の大学の場合、語学要件の定めがないことが多いため、「TOEFL-ITP 500, IELTS 5.5, TOEFLiBT®61のいずれかを満たす」という学内語学要件さえクリアすれば応募できるのである。ドイツや北欧の大学の場合、この学内条件が適用されるため、アメリカなどの英語圏ほど高い語学力を証明する必要がなく、応募者が多くなる傾向がある。

### 3.2 相談時に抱いていた不安

学生は相談時に図2のような不安を抱いている（複数回答有）。



【図2：相談者の留学に対する不安】



【図3：大学に期待する留学支援】

理系の場合、学部卒業後大学院に進む学生も多いが、相談の時点では就職も視野に入れていることが分かる。帰国後の就職活動への悪影響は、理系・文系に共通した不安であると言える。そのほか、語学力の不足、留学先の選定、金銭面、留年の可能性が挙げられている。

本学では英語力強化について、次のような解決策を講じている。まず、TEA (Tohoku University English Academy) を設置し、授業の合間や放課後を利用して、英語学習に取り組むことのできるプログラムを提供した。加えて、英語学習カウンセリングや学内でのTOEFL iBT®実施などの環境整備を行った。金銭面については、GLCをはじめ、海外留学プログラムを実施する部局が、毎年日本学生支援機構の海外留学支援制度に応募し、留学予定者を支援する奨学金を獲得しているほか、成績優秀者の留学支援を目的とした大学独自のグローバル海外留学奨励賞を準備している。また、政府が官民協働で、意欲と能力のある全ての日本の若者が海外留学へのチャンスを実現できるようにとの目的で始められた奨学金「トビタテ！留学JAPAN」への応募を奨励しており、GLCの教員は応募者への書類・面接指導・サポートを行っている。

### 3.3 大学に期待するサポート

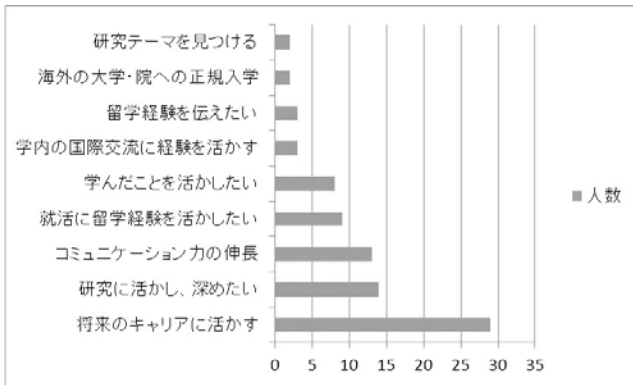
図3は学生が大学に必要だと感じているサポートについての回答結果である（複数回答有）。

情報提供やアドバイスを希望する学生が多い。この点について、GLCでは2016年10月に地域担当教員制度を導入した。これは、北米、欧州、アジア・オセアニアの地域担当教員が派遣学生を留学前、留学中、帰国後までサポートする体制である。交換留学予定者に対しGLCでは2・3回の事前研修を行うとともに、地域担当教員にいつでも相談できる体制を取っている。交換留学予定者は研修時の課題を地域担当教員に提出し、個別にアドバイスをもらいながら出発準備にあたる。留学中や帰国後も、地域担当教員からのアドバイスや指導を受けることができる。

留学前の情報提供としては、5月と10月の説明会時に帰国者による報告会を行い、実際に留学を経験した先輩から留学成果を聞くことができる。また、留学経験者をグローバルキャンパスサポーター（GCS）として雇い、未経験者の相談対応や、部活に入っている学生向け説明会の開催、留学予定者を対象とした英語ディスカッションのイベント開催など、経験者自身が必要だと思う留学支援を行ってもらっている。

### 3.4 留学後の予定

留学後の進路や留学の成果の生かし方については、図4のような結果となった（複数回答有）。



【図4：帰国後の留学成果の生かし方】

留学を目指す学生の多くが、留学で得られる成果を自身の将来に生かしたいと考えている。図2で見たように、留学による就職活動の遅れを不安視する一方で、留学した暁には、習得した学問やコミュニケーション力、経験を発揮したいと考えているのである。帰国学生が留学で得た成果を赤裸々に語る報告会は、留学希望者のモチベーションが高まる機会となっている。

#### 4. 留学未経験者を対象とする調査/結果

先にも言及したが、GLCでは留学経験者をグローバルキャンパスサポーター（GCS）として毎年約10名雇用し、学内の留学説明会や交換留学生向け事前研修時のサポートにあたってもらっている。今回はパイロット調査として、留学経験のないGCSの友人に2016年12月にアンケート用紙を配布、同月内の締切で回答を求め、回答者の中から任意でインタビューに応じる学生を募った（アンケート内容は添付資料2を参照）。アンケートの回収方法は、筆者の研究室の外に提出用の封筒を用意したのに加え、メール提出も受け付けた。期間は2017年1月5日～1月15日とし、インタビューは同年1月～2月に行った。アンケートの回答者は合計76名。内訳は、50名が学部生（工18名、文11名、教育8名、経済6名、理・薬学2名、法・農、医1名）、26名が大学院生（工20名、文・情報科学2名、教育・農1名）で、全員日本人学生であった。学年は1年12名、2年6名、3年17名、4年15名、博士前期1年17名、博士前期2年9名であった。集計時はアンケートの記述内容について筆者と大学院生の2人で話し合いながらキーワードに直した。

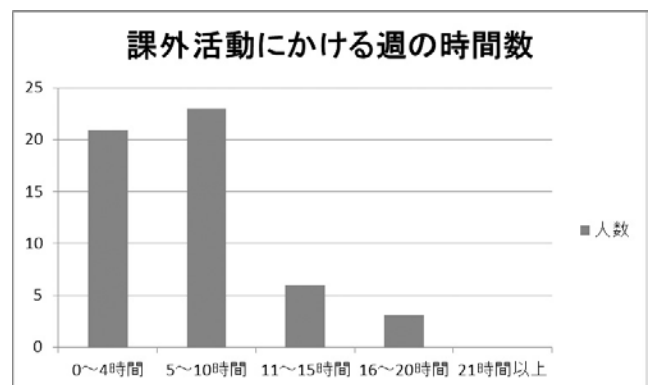
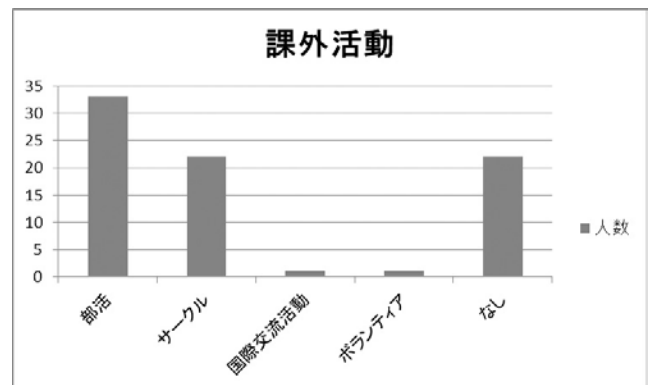
回答者のうち14名よりインタビューに応じるとの記載を得たため、依頼メールを送信したが、実際に返信がありインタビューを行った学生は4名にとどまった。インタビューの場所は筆者の研究室で質問内容は、1) 現在力を入れて取り組んでいること、2) 留学への興味・踏み切れない理由、3) 留学するのであれば必要だと思うサポートを中心に尋ねた。1人15分～30分間のインタビュー中は学生の意見を聞くだけでなく、必要に応じて留学に関する情報を提供するように努めた。

#### 4.1 アンケート調査結果

課外活動の有無については図5のような回答となった。留学経験のない学生の7割が部活やサークル等の課外活動に参加していたが、課外活動参加者の6割は週の活動時間が10時間以内であった。

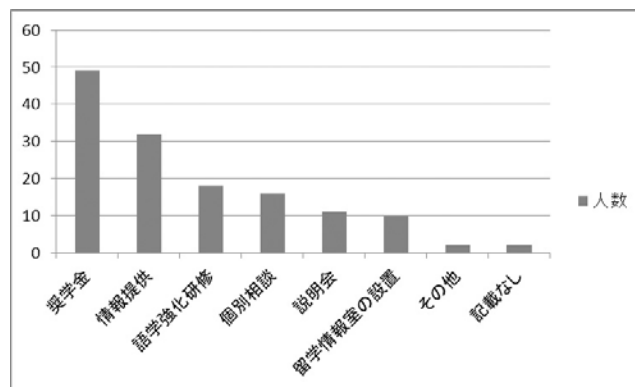
アルバイトの有無、時間数についても同様に尋ねたところ、「あり」と回答した学生が5割を越え、時間数は「5～10時間」が最多で、「0～4時間」、「11～15時間」が続いた。

学内の留学説明会に参加したことがないと回答した



【図5：課外活動の種類と週の時間数合計】

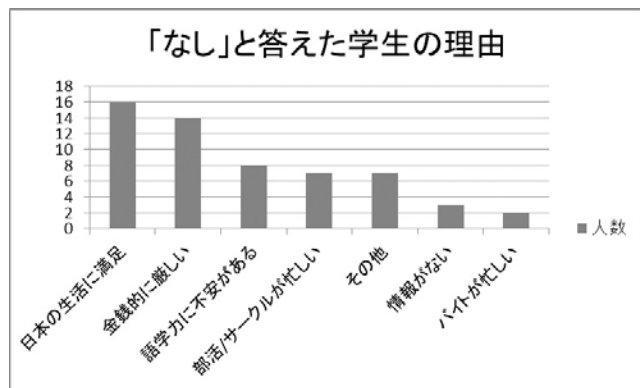
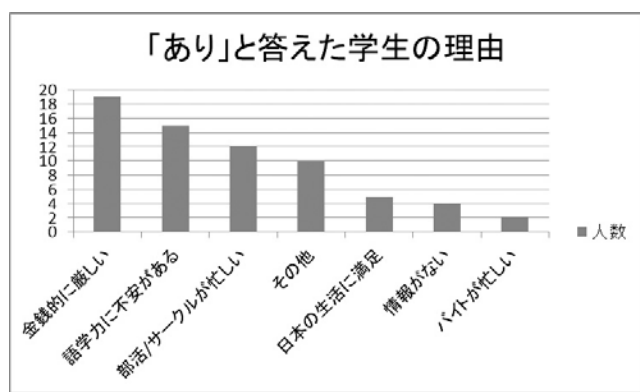
学生は8割を超えた。その理由は「説明会がいつ開催されているのか知らない」、「知っているも行かない」、「忙しい」、「タイミングが悪い」、「予定が合わない」、「イメージがわからない」などであった。その一方で、留学への興味については5割以上となる40名の学生が「あり」と回答し、35名が「ない」、1名は記載なしであった。興味が「ある」にもかかわらず説明会に参加しない理由としては、「金銭面や語学力の不足」、「課外活動の忙しさ」が挙げられ、留学に興味がない学生の理由には「日本の生活に満足している」との回答が多く見られた(図6)。



【図7：留学するために必要なサポート】

先行研究でも見たように、ここでも金銭的な負担の大きさから奨学金を望む声の大きいことが分かる。

また、情報提供を希望する学生も多く、留学への興味の有無に拘わらず、情報を広く伝えることの重要性を示唆している。しかし、留学情報を提供するために開催している留学説明会に、8割の学生が参加していない現状を考えると、学生の留学を促進するためには、何か別の支援が必要なのではないかが示唆された。



【図6：留学に興味の「あり」・「なし」の理由】

また、必要なサポートについては図7のようになった。

#### 4.2 インタビュー調査結果

インタビューを始めるにあたっては、学生に「インタビューの目的は学内の留学促進の方策を検討するため、留学経験のない学生から率直な意見を聞くことであり、学業成績や留学の応募に一切影響はありません」と説明し、同意を得た。インタビューに応じた学生4名は全員アンケートに「留学に興味あり」と回答していた。以下が4名の概要とインタビュー時の回答内容である(下線は筆者)。

##### ・学生1

博士前期1年の男子学生。学部時代は運動部に所属、学部2年～3年の1年間はアルバイトもしていた。現在はいずれもしていないが、留学は考えていないという。教員免許を取るため必修授業が多く、勉強に専念したいからとのことであった。

インタビューでは、「留学にそこまで興味がある訳ではなかったので、自分で情報収集する意欲はなかった。留学経験者の話を聞いてすごいとは思ったが、自分がそうなりたいとは思わなかった。もし留学に行く

のであれば、出発までに語学力を付けておきたいし、そうでなければ十分な留学の成果は得られないと思っている。金銭面でもこれ以上親に負担をかけられない。」と話した。

以前海外研修で韓国に行った経験があり、同年代の学生が英語で会話する姿に刺激を受けたことがあったというが、この研修を留学とは捉えていないようだ。また、留学という何か特別な準備が必要であるとの思いが強く踏み切れないという。学内の短期留学プログラムを紹介し、奨学金についても説明したが、留学への意欲を示す様子は見られなかった。

#### ・学生2

博士前期2年生の男子学生。学部時代から文化部に所属、今も週に2時間ほど活動している。学部時代はアルバイトもしていた。インタビューでは、「留学に興味はあるが研究が忙しく、チャンスがなかった。留学という卒業が遅れるイメージがあり、自ら情報収集するほど興味はなかった」と話した。来年4月から希望の就職先に内定をもらっているため、今後留学の予定はない。計画通りに進路が決まり、学生生活に満足している様子が伺えた。

#### ・学生3

学部3年の男子学生。運動部とアルバイトでの活動が週20時間に及び、日々忙しい。インタビューでは、「留学説明会に参加したことはない。留学に興味はあるが、部活を休めないし、金銭的にも厳しい。留学プログラムに参加した友人を見ていると事前研修等があり大変そうで、応募時期も早いと聞いたので、自分には無理だと思っている。また、留学で留年したくない。」と話した。

この学生には留学プログラムに春・夏休みだけの短期で授業と重ならないプログラムがあることや、事前・事後研修の回数と内容、大学からの手厚い財政的支援の存在を説明したところ、部活の引退後なら参加できそうだと意欲を示した。

#### ・学生4

学部3年の女子学生。課外活動やアルバイトはしていない。1年生の頃文化部に所属していたが、勉強が忙しくなり退部した。卒業後は大学院への進学を希望しており、留学にも興味はあるが、目的を明確にし、

しっかり準備をしてから応募したいという。インタビューでは、「説明会に参加したことがあるが、金銭面や語学力に不安があるし、日本での生活に満足してもいるので、実際に行くかどうかは迷っている。治安も心配だ。」と留学に踏み切れない理由を語りつつ、「留学先で何が学べるのか、十分な情報があれば前向きに考えたい。」との姿勢も示した。留学前・留学中の大学のサポート体制や情報収集する方法を説明したところ、意欲を示し、インタビュー終了時には自身の留学の方向性が見えたことと喜ぶ様子が見られ、このような情報を知りたかったと話した。

4名に共通していたのが、自ら情報収集するほどには留学に意欲がないことであった。前節でみたように、留学の情報提供を望む声がある一方、留学説明会に参加したことがない学生が8割を越えていた理由はここにある。

また、4名中3名から金銭面での負担が阻害要因に挙げられた。その他、留学するのであれば「万全の準備を」という意見が聞かれた。費用や留年の心配があるなかで取って留学するのなら、成果をしっかりとりたいと考えていることがうかがえる。インタビュー中留学に興味を示した学生には、情報提供を行ったため、具体的なイメージを持つことができた学生もいた。4名という限られた対象ではあったが、一歩踏み込んだ手助けをすることで留学への意欲が高まる、潜在的な留学希望者がいることも確認できた。

## 5. 考察とまとめ

本稿では、留学相談者と留学未経験者の2つの異なる集団に対する調査結果を紹介した。前者へのアンケートでは、留学先として英語圏や英語で授業が受けられる大学を希望する傾向が高かった。留学に対する不安としては、就職活動との兼ね合いや語学力の不足、留学先の選定や金銭面、留年の可能性が多く挙げられた。留学のサポートについては、情報提供やアドバイスを希望する声が多かった。また、多くの学生が帰国後は留学の成果を将来のキャリアに生かしたいと考えていた。留学希望者にとって留学先の情報収集は重要である。その意味で地域担当教員との対話や経験者に



よる留学報告会での体験談の発信は有効であろう。

学生の海外留学を促進するためには、まず、既に提供している留学情報やサポート体制の周知をはかることが重要である。今後は協定校のパンフレットを閲覧できる図書館の開設や経験者の報告書の閲覧等の工夫、オンラインでの情報提供なども必要であろう。帰国した学生より自分の留学先の同窓会WEBサイトを立ち上げ、留学サポートにあたりたいとの声も出てきているが、このような声を大学でどこまで支援するのも検討が必要である。

留学未経験者のアンケートとインタビュー調査では、自身の優先すべきものが他にあり、留学に興味はあってもそれとのバランスを考えて留学に踏み切れない様子が伺えた。阻害要因としては、留学相談者同様、金銭面や語学力の要因が大きかった。その後のインタビュー調査では、留学に興味はあるが、留学するのなら万全な準備をしたいと考えている学生がいることや、自ら情報収集するだけの意欲がなかったとの声を得た。留学を断念したことで希望の就職先が決まり、満足している様子も見られた。

学生一人ひとりの価値観はさまざまで、留学の重みも異なっていることが分かる。まず留学に興味のある学生への支援強化と留学の成果を伝える方法を充実させることが重要ではないだろうか。同時に、卒業期の遅れを不安に思う学生に対して、単位互換を進めるためのラーニングアグリーメントを導入したり、専門に入る前に留学から戻って来られるよう、留学相談や説明会で1・2年生の早い段階での留学を勧めることも、留学促進につながるだろう。また、インタビューに応じた学生の中には、当初自ら情報収集するほどには留学に興味はなかったが、目指す留学の方向性が明確になったことで意欲を高めた学生もいたことから、大学の留学支援の在り方を見直す必要性も示唆された。

本稿で紹介した調査対象はごく限られた集団である。これをパイロットとして、今後も留学相談者への調査を継続するとともに、留学未経験者に対しては大規模調査を行って、本稿で明らかとなった点をより客観的に分析し、本学の学生の傾向を把握するとともに、海外留学促進の具体的な対策を講じていきたい。

## 引用文献

- 池田庸子. 2011. “海外留学の意義とメリットを考えるー海外留学によって何が得られるかー”. ウェブマガジン「留学交流」. 1-10.
- 小林明. 2011. “日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策”. ウェブマガジン「留学交流」. 1-17.
- 小島奈々恵, 内野悌司, 磯部典子他. 2014. “日本人大学生の海外留学に関する意識調査ー『内向き志向』と留学意思の関係ー”. 広島大学保健管理センター研究論文集. 30巻, 21-26.
- 文部科学省. 2009. “大学の国際化について”.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/025/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/15/1287996\\_1.pdf#search=%27E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AE%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E5%8C%96%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%EF%BC%8D%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%27](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/025/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2010/01/15/1287996_1.pdf#search=%27E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%81%AE%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E5%8C%96%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%EF%BC%8D%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%27), (2017-1-18).
- 東北大学. 2015. “平成27年度【東北大学生生活調査】のまとめ”.  
[http://www.tohoku.ac.jp/japanese/studentinfo/studentlife/09/studentlife0901/2015\\_jp.pdf](http://www.tohoku.ac.jp/japanese/studentinfo/studentlife/09/studentlife0901/2015_jp.pdf), (2017-1-18).
- ブリティッシュ・カウンシル. 2010. “ブリティッシュ・カウンシルの留学に関する調査概要と結果”.  
<https://www.britishcouncil.jp/about/press/20111114-mobility-research>, (2017-1-18).
- ベネッセ教育総合研究所. 2012. “大学データブック第3章 海外留学”.  
[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai\\_databook/2012/pdf/data\\_06.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/dai_databook/2012/pdf/data_06.pdf), (2017-1-18).

添付資料1

**留学相談者へのアンケート**

留学相談にお越しいただいた皆さんに、以下の点についてご意見をお伺いしたいと思っています。ご記入頂いた内容は、東北大学の留学プログラムの改善等で参考にさせて頂くことがあるかもしれませんが、一切個人情報の開示されませんので、ご理解頂ければと思います。また、個人が特定される表現は使用いたしませんので、ご安心ください。

1. 留学する時期や留学先を選ぶにあたり、心配していること、迷いはありますか？
2. 1を克服するために、大学に何かサポートを期待しますか？
3. 留学経験を帰国後どのように生かしていきたいと考えていますか？

添付資料2

**留学未経験者へのアンケート**

本アンケートは皆さんの海外留学の意向を調査し、今後の教育・支援の改善につなげるために実施するものです。調査結果は、皆さんの個人情報が分からない形で本学の留学促進につなげていきたいと考えています。上記の目的以外で調査結果を使用することはありませんので、ご協力お願いします。

1. 学部： \_\_\_\_\_ 2. 学年： \_\_\_\_\_
3. 課外活動の有無（複数回答可）： \_\_\_\_\_

部活（文科系/理科系）・サークル・国際交流活動・その他（具体的に） \_\_\_\_\_

4. 3の質問で活動『あり』と回答された方、週の平均的な活動時間を教えてください。複数所属している場合は、関連のあるもの全てについて回答してください。

部活・サークルの週の平均的な活動時間： \_\_\_\_\_ 時間

国際交流活動の週の平均的な活動時間： \_\_\_\_\_ 時間

その他の週の平均的な活動時間： \_\_\_\_\_ 時間

5. 学外での活動の有無（アルバイト等）： \_\_\_\_\_ ある・ない

6. 先の質問で『あり』と回答された方、活動内容と週の平均的な活動時間を記述してください。

活動内容： \_\_\_\_\_

週の平均的な活動時間： \_\_\_\_\_ 時間

7. 留学説明会に参加したことはありますか？： \_\_\_\_\_ ある・ない

8. 『ない』と回答された方、該当する理由を教えてください（複数回答可）。

いつ説明会をしているのか知らない・聞いたことはあるが参加したことはない・

特に興味がない・その他（具体的に） \_\_\_\_\_

9. 留学に興味がありますか。： \_\_\_\_\_ ある・ない

10. 『興味ある』と回答した方、留学に踏み切れない理由を以下から選んでください（複数回答可）。

留学に関する情報がない・部活/サークルが忙しい・バイトが忙しい・金銭的に厳しい・語学力に不安がある・日本の生活に満足している・その他（具体的に） \_\_\_\_\_

11. 『興味がない』と答えた方、以下の理由から当てはまるものを選んでください（複数回答可）。

留学に関する情報がない・部活/サークルが忙しい・バイトが忙しい・金銭的に厳しい・語学力に不安がある・日本の生活に満足している・その他（具体的に） \_\_\_\_\_

12. 留学をするのであれば、大学はどのような支援をすべきだと思いますか（複数回答可）。

留学情報室の設置・情報提供・留学個別相談・留学説明会・奨学金・

出発前の学内での語学強化研修・その他（具体的に） \_\_\_\_\_

ご回答内容によっては、直接お話を伺いたいと思っておりますが、インタビューに応じていただける方は、連絡の取れるメールアドレスを記載してください。

名前： \_\_\_\_\_ ， メールアドレス： \_\_\_\_\_

ご協力ありがとうございました。

